地震からの復興 温かい支援の手

午前8時43分の地震発生後、市は直ちに災害対策本部を設置。県や警察、消防などと連携しながら、情報収集や被害の対処に全力を尽くしました。

被災地には、緊急消防援助隊や警察、自衛隊、災害派遣医療チームなどが各地から応援に駆け付け、救助活動などに当たりました。特に自衛隊は、2万5772人もの人員を本市や一関市、宮城県栗原市などに派遣。被災者の救助はもちろん、道路や水道の復旧、給水、入浴サービスなど多方面にわたって活躍しました。ほかにもボランティアの申し出や救援物資などを、全国の皆さんからたくさんいただきました。また、義援金やふるさと応援寄附金（ふるさと納税）も市にたくさん寄せられ、県経由の義援金を合わせると、総額で5億5000万円を超える額になっています。寄せられた義援金などは、被災した人への見舞金や復興支援などに大切に使わせていただきました。

復旧の面では、7月に国が本市を「局地激甚災害」に指定。被災した道路や農地などの復旧の際に、国から手厚い支援が受けられるようになりました。それとは別に市は、国の制度では該当しない小規模な復旧作業への支援制度などを独自に制定。1日も早い復興を願い、後押しをしました。また、地震直後から、被災した建物や宅地の危険度判定を行い、余震による2次災害の防止にも努めました。被害が大きかった世帯には、税金や使用料などの減免も行っています。衣川区では、長期間水道が使えない状態が続いたため、市営温泉施設を無料開放しました。避難が長期化していた被災者には、県が当面の生活拠点として仮設住宅を建設。胆沢区愛宕に4戸、衣川区石生（いしう）に4戸の仮設住宅が建てられ、8月1日に避難住民に引き渡されました。1年が経過した現在でも、避難住民の仮設住宅暮らしは続いており、市は、入居者の人たちと話し合いながら、今後の行動を支援していく予定です。

風評被害の対策として市は、農業団体や観光団体と協力して、キャラバン体を結成。8月20日に、奥州大使や首都圏ふるさと団体の皆さんと一緒に、駅やデパートなどで元気な奥州市をPRしました。

10月4日に行われた清衡公遷都行列では、清衡役で出演した俳優の村上弘明さんが、すべての自治区を練り歩き、わたしたちを元気付けました。また、村上さんは、遷都行列の前日に仮設住宅を訪問。避難住民と触れ合い、温かい言葉をかけました。地震の影響で夏祭りが中止となった衣川区では、11月1日に鍋料理の味を競い合う「奥州ころもがわ　なべ合戦」を開催。自慢の料理を被災者らに振る舞い、胃も心も温めました。

地震の衝撃があまりにも大きく、余震が断続的に続いたことなどから、被災者のメンタルケアも行われました。子どもや高齢者、避難住民などを中心に、医師や保健師などがカウンセリングや診察を行い、心に負った見えない傷の治療に当たりました。

1

2

3

4

1割れたガラスでけが人が出た玉里保育所。歯科医師会からの見舞いの品に喜ぶ園児たち
2自衛隊は水道の復旧など多方面で活躍した　3首都圏で元気な奥州市をＰＲしたキャラバン隊　4自然観察に向かう途中で転落したバス。５月から解体・撤去作業が始まる

Voice 被災者の声

北股地区センター長
高橋奉美（ともみ）さん(67)
＝衣川区大平＝

本家の庭に着いて軽トラックから降りた途端「ドドドドドド、ガタガタガタ」という激しい揺れに襲われました。「大丈夫かぁ」と大声で安否を確認し、自宅へと走りました。向かう途中で、重苦しい地鳴りとごう音。山から赤茶色の土煙が舞い上がり、崩れ落ちる様子が見えました。自宅に着くと、家族が震えながら門口に立っていました。孫を車の中へ避難させようとしたとき、また強烈な余震が。左右の車輪が30㌢も浮き、小柄な母はボールのように上下しました。一方、地区センターは、6月16日から避難場所や連絡所などになりました。地区民の疲労は極限に達しましたが、温泉の無料入浴やコンサートなど、癒やしの場の提供に努めました。今回の地震が伝えたのは「命と生活をどう守るか」、そのために「防災対策をどう構築するか」だと思います。災害時にすべき行動を、みんなで学び訓練することが必要ではないでしょうか。

愛宕保育園保育士
松平悦子さん(59)
＝胆沢区若柳字堰袋＝

保育園の玄関で園児を受け入れていたとき、突然「ドーン」という衝撃が走りました。その衝撃が地震だとすぐに気付きましたが、すさまじい揺れで、逃げることができません。必死に子どもたちを抱えて揺れが収まるのを待つしかありませんでした。教室内にいた園児が心配になり、急いで向かうと、子どもたちはあまりの出来事に泣くこともできず、驚いた表情のまま固まっていました。強い余震で建物がぎしぎしと揺れる中、何とか園児全員を外へ連れ出しました。恐怖で震えている子どももいましたが、誰一人けががなかったのは不幸中の幸いだったと思います。その後、心配した保護者が続々と迎えにやって来ました。子どもの無事を確認して、安心した保護者の顔を見たとき、わたしの目から涙が。張り詰めていた気持ちが緩んだのでしょうね。あのときの気持ちは一生忘れることができません。